

【資料紹介】

池田英雄著「修学の道場回想録 —七十年前の思い出の糸をたぐりて—」(四) 「恩師片影」

浅沼薫奈

【解題】

本稿は、大東文化学院本科3期生、高等科6期生である池田英雄による『修学の道場回想録 —七十年前の思い出の糸をたぐりて—』（以下、『回想録』）について、『大東文化大学史研究紀要』第5号に引き続き紹介するものである。本稿では「第四部 恩師片影」を紹介する。池田英雄氏の経歴詳細及び『回想録』目次（構成）全容については、『大東文化大学史研究紀要』第3号、同4号、同5号においてこれまで紹介した『回想録』にそれぞれ付した「解題」を参照されたい。今号で紹介する内容をもって、『回想録』は完結となる。

前号までにおいてすでに紹介してきたように、池田英雄は大東文化学院本科及び高等科において計6年間を学んだ後、1933（昭和8）年より自身の母校でもある財団法人日本中学校の漢文科教員をつとめ、敗戦後（新制）は幾つかの都立高等学校を中心に漢文科教員を続けた。同時に、財団法人無窮会東洋研究所で募集した研究員一期生に応募し合格、以降は同研究所での活動を中心に、より本格的な漢学研究を続けることとなった。本稿で紹介する第四部においては、主として大東文化学院と財団法人無窮会東洋研究所とにおいて出会った、思い出深い5名の恩師について綴ったものである。英雄自身が直接見たり経験したりしたことを中心に、ごく個人的な心象をもとに記述（述懐）が進むという特徴があるが、その一方で、それがゆえに著名な近代漢学者たちの私的な様子を伝える、貴重な逸話を多分に含む内容となっている。そのため、解題ではごく簡

単に、本文記述内容を補足する意味で恩師 5 氏の略歴を紹介しておく。

一人目の濱隆一郎は、青洲と号した。1890（明治 23）年に長野県松本市に生まれ、旧制松本中学を中退後に上京、二松学舎で三島中洲に師事し漢学を修業した。二松学舎卒業と同時に同校房長となり、同時に講義も担当した。なお、晩年に再び上京し二松学舎で教鞭をとる傍ら、日本倶楽部漢詩会においても長く講師をつとめている。森鷗外が第二代総長をつとめた時期の帝室博物館（後に東京国立博物館）に勤務したことが本文中に記載されているが、青洲は大正期より 1939（昭和 14）年頃まで東京帝室博物館において漢詩文校訂や書画の監査業務に携わった。もともとウィーン万国博覧会への参加を機に集められた美術品類の保存管理を行うことを目的に設立された帝室博物館は、宮内庁図書寮の付属博物館であり、翻訳を含む多分野にまたがる活動がなされていた。初代総長は股野琢で、友人であった三島中洲へ帝室博物館業務に携わる適任者の相談をしたことから青洲が紹介され、以降 20 年余りにわたり帝室博物館での仕事に従事した。戦時下には国務院総務庁官房文書課職員として満洲に渡っており、敗戦後に帰国し郷里へ戻り、信州大学医学部および教育学部で 10 年にわたり東洋哲学を講じた。信州大学を定年退職後に二松学舎大学に教授として迎えられ、80 歳を迎えるまで漢詩学の講義を行った。1980（昭和 55）年 5 月、肺結核を患い 90 歳で死去した。なお、大東文化大学の元教授で文学部長をつとめた濱久雄は青洲の長男であり、戦時体制下の最中に大東文化学院に学び、在学中には学徒動員も経験している。

川合孝太郎は、槃山と号した。幕末の 1865（慶応元）年、現在の鳥取県にあった田口家に生まれた。後に神儒仏三道による国教確立と反欧化主義を唱え「日本国教大道社」を設立した活動家である川合清丸に養子縁組し、川合姓となった。大阪随一の名門私塾であった泊園書院で十余年学び、漢学を修めその頭角を現した。養父の興した大道学院教授とし

で活動に携わる傍ら、大東文化学院や早稲田大学、無窮会などで漢学を講じたほか、個人的な勉強会として「説文会」なども主催した。1940（昭和15）年3月、持病により死去した。後に槃山の蔵書一万五千余冊は財団法人無窮会へ寄贈され、「槃山文庫」として整理公開されている。

川田瑞穂は、雪山と号した。1879（明治12）年5月に高知県に生まれた。大阪に出て梅屋処塾にて山本梅崖に師事した後、大東文化学院創設に積極的に携わった。1923（大正12）年より大東文化学院助教授、後に教授となり本学漢学教育の発展に尽力したが、創設直後の学院紛擾の混乱の渦中であって辞職した。1929（昭和4）年より早稲田大学高等師範部（後の教育学部、現在の教育・総合科学学術院）教授となる。大正初期より内閣嘱託を務め、敗戦時に終戦の詔勅起草に携わったことは著名である。そのほか、漢学研究所（奥繁三郎経営）理事や無窮会会長事務代行・理事、東洋文化学会評議員・幹事、東洋文化研究所学監・所長代理などを歴任、1951（昭和26）年1月に死去した。

竹下幾太郎は、1938（昭和13）年3月より1939（昭和14）年1月まで歩兵第114連隊長を務めた陸軍大佐である。大東文化学院への配属時は陸軍少佐であった。その前には歩兵大尉として、「関東戒嚴司令部條例」を受け関東戒嚴司令部の編成に組まれ任務に当たっていたことが確認される。関東戒嚴司令部とは、関東大震災直後の東京市内において非常徴発令と臨時震災救護事務局の設置及び戒嚴令（準用）についての勅令が1923（大正12）年9月2日に出された折、施行地域が東京市を含む6箇所に決められ、翌9月3日に「関東戒嚴司令部條例」が出されたことを指す。大東文化学院において配属将校をつとめた後、陸軍大佐となり連隊長となった。

吉田増蔵は、学軒と号する。1866（慶応2）年、現在の福岡県に生まれた。村上仏山の私塾、水哉園において漢学を学んだ。京都帝国大学で支那哲学を専攻し、帝大卒業後には米国留学も経験した。帰国後、奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学）等で教壇に立った。1920（大正9）

年より宮内省図書寮編修官となり、森鷗外らと親交を深めた。特に元号研究者として名高く、『元号考』を著したほか、元号「昭和」を考案したことで知られる。また、「明仁」をはじめ皇族の名の考案にも多く携わった。「米国及英国ニ対スル宣戦ノ詔書」（「開戦の詔勅」）の起草に携わった直後、1941（昭和16）年12月に持病により死去した。森鷗外が死去した際、自身の和漢蔵書はすべて親友である学軒へ譲るよう遺言しており、鷗外所蔵書を含む学軒蔵書は無窮会へと寄贈され、本文中にも言及されているように池田英雄によって近年になって整理され保管されることとなった。

最後に、著者である池田英雄氏についての印象を解題者の視点から僭越ながら少々申し上げておきたい。初めてお会いした時にはすでに池田氏は90代も後半となっていて、百歳まであと2年ほどとお話しされていたと記憶する。その場には長く連れ添われた奥様も同席されていた。その様子から、穏やかで大変仲のよいご夫婦のようにお見受けした。奥様は、英雄氏と結婚して驚いたことなどいくつかの思い出話を短く控えめにお話くださり、その話から彼が大変勤勉で努力家であることが伝わってきた。たとえば、旧制中学（戦後は新制高校）で長く教壇に立たれていた池田氏は、学校での日中の仕事を終え定時に帰宅すると、まず翌日の授業準備を済ませる。そして簡単に夕飯を終えると、すぐに『史記補注』の研究にとりかかる毎日であったという。そのルーティンを絶対に崩さなかった。父池田四郎次郎が1933（昭和8）年に急逝した後を継ぎ、完成間近であった『史記補注』をこうして約40年かけてこつこつと増補校訂し、刊行までこぎ着けたエピソードは著名である。刊行助成を受けることが決まり研究の目処がついた時には潔く教員の仕事を早期退職し、最後の編集作業に注力したことは『回想録』のなかでも触れられている。また、池田氏は贅沢を一切しない人で、欲もなく、暴飲暴食もせず、研究上の議論はしても人と争うようなことはしなかった。日々の食事も体に負担をかけない量でごく少なめ、バナナも半分ずつ食べていたと言う。

奥様が、たまには少し贅沢なものを食べたり、好きなものを買ったりしても家計は大丈夫ですよと勧めても、静かに首を振って、ただ毎日もうくと机に向かい勉強だけをしている人でした、とお話されていたことが印象深かった。池田氏は人並み外れて義理堅いところもあって、何かあった時には決して出し惜しみせず、すぐに自身の出来る限りの感謝の品を贈り、丁寧な手紙を出されるような人でもあった。

改めて池田氏の『回想録』を活字にして解題を付し、こうして4回にわたり資料紹介させていただくことができ、解題者自身も十数年前にお会いしお世話になった池田氏へ、わずかながら恩返しが出来たように思う。

【解題者注】

原稿について、基本的に原文をそのまま掲載しているが、本文中の明らかな誤字等については適宜修正を加えている。また、ごく一部に旧カナ遣い等が見られたが、現代カナ遣いに整え統一した。一方、敬体と常体との混在使用はそのままとした。

「修学の道場回想録 ―七十年前の思い出の糸をたぐりて―」

第四部 恩師片影

- 濱隆一郎（青洲）先生の慈愛
- 川合孝太郎（槃山）先生に師事して
- 川田瑞穂（雪山）先生の恩情
- 竹下幾太郎（陸軍少佐）先生のご指導
- 吉田増蔵（学軒）先生の学殖に想う

○濱隆一郎（青洲）先生の慈愛

先生は漢詩界の最長老として齊しく人の仰ぐところでありました。先生は九十余年の風雪に堪えられた稀にみる恵まれた体質の方で、ご記憶がよろしく、また人に接するに温かく、御身を持するに厳しい方であったとお見受け申しました。これは私が先生にいただく第一の印象です。

先生は話題が豊富で、その多くは古今の詩文と歴史とにわたるものでありました。そしてその一話一語には満腔の国家経綸の思想から湧き出るものでありましたから、単なる雑談の域を越えて、いつも太い一本の線が通っていました。苟も談たまたま道ならぬ徒に及びますと、論難は急で、烈々たる気魄は顔面にあらわれ、満身をふるわさんばかりに激昂されることが屢々であった。この破邪顕正のご精神は、たくまずして人の心を撲つもので、私はいつも耳を傾けながら、太史公の論贊を誦むにも似た心地よい感銘を覚えた。ただこの論難も、それはやさしい談笑の相間に垣間みる種のものでありましたから、ご高話は大層楽しいものでした。先生の詩に於ける、文に於ける、その吐露される詩藻は、ただ花鳥風月にとどまらず、常に先哲を想い、祖国を憂うの真情から出ておりました。

顧りみまするに、私は幼少の頃からお世話になり、中年そして晩年に到るまで、前後通計七十余年の長きにわたっております。この間、温かく迎えられ、恰も慈父に接するの思いにかられます。初めて先生にお目

にかかった幼児の頃の記憶は定かではないが、それは多分、もの心のついた四・五才の頃(明治の終りから大正の始め頃、西暦 1912～1914)であったと思います。私の父(蘆洲)は、三島毅(中洲)先生のご創立の二松学舎(現在の二松学舎大学)で教えておりました。濱先生も若手の教師として席を同じくしておられたのでしょう。この頃から特に父をお慕い下さっておられたようで、私の子供の頃には、青山南町五丁目の拙宅をよく訪ねられ、私の母も「濱さん～」と呼んで温かく迎えておりました。幼い頃、先生がおいでになると、私は先生の背中におぶさって、庭から門前へと出ることが嬉しくて、幼な心にも「先生の背中は広くて大きなあ」と思ったものでした。この思いはあれから九十余年を経た今も忘れられません。後に先生はご結婚なされて、ご長男の久雄様を始めよいお子様をもうけられましたが、あの広い背中を一番先に占領したのは、この私であるなどと、今も時折りなつかしく思い出されます。

もう一つ先生についての心に暖かく残っている印象は、それは私の小学校1・2年の頃のことでしたが、先生はみやげに当時流行のブリキ製の電車の玩具を持参して下さった。ボディは美しい彩色で、車体の横のバネをちょっと動かすと、乗客の顔がどの窓にもいっせいに現われ、またバネを動かすと、たちまち一人のこらず消えてしまう。この現れたり消えたりの変化が面白く、私にとってのかけがえのない宝物となりました。このようなことが思い出されてなりません。

○先生のご馳走 ー私の中学生時代の想いで

その後の思い出は中学生時代へと飛躍してしまいます。中学校の夏休みになると、父のすすめで九段坂上の二松学舎開催の夏季講習会へ二ヶ年ほどつづけて通いました。講義は一般社会人へ開放されたもので、私のような中学生は稀でした。大人の中にまじって、主として濱先生の「日本外史」のお講義を拝聴しました。先生は原文を朗々と朗読されると、一息ついて解説に入られる。朗読は早からず遅からず、中学生の私にもよくわかりました。講習の最後の日のこと、先生の講義も終り、私が帰る

うとすると、先生は私に向って、自分もすぐに帰るから、暫く入口で待っているようにとのお話で、…やがて先生は出てこられた。私は先生のお供をし校門前の坂道を靖国神社方面へ向って登りきると、そこに在る「大村そばや」へ案内される。昨年もここでご馳走になったことを想い出して、極力ご辞退するのだが許されず、今回もまたご馳走になるハメになって仕舞った。私は父から濱先生は大層えらい方だと聞いておりましたので、この先入観が先にたち、子供心にも緊張し、からだは固くなると云うふうで、折角の先生のお心づくしにも「食えどもその味を知らず」の体でした。このようなことが、今も想い出されてなりません。その後、幾十年となく先生のお宅へ何う度に、先生はよくご馳走してくださった。

○森鷗外と濱先生

先生はにこやかなお話の中にも必ずと云ってよいほど森鷗外の人と為りを語られ、称揚されておられました。鷗外は先生のご勤務になった帝室博物館の館長で、後には図書寮の頭^{かみ}を兼任されました。先生は鷗外の話のあとには、先考蘆洲の逸話なども数多く聞かせてくれました。先考が嘗て鷗外の請を入れて、書経の講義をした話などもその一つで、私は始めて知って驚きました。このことは後日（昭和四十七年、1972）、私等の宿願久しかった先考蘆洲の遺稿「史記補注」を刊行するに当り、先生は1000字に近い長文の序文をお寄せ下さったばかりか、特に「やまと新聞」紙上に筆を振われ、「史記補注の発刊に思う」との見出しの下に、先考の学をご称揚下された。その中の一節に蘆洲が鷗外に請われて尚書の講義をした逸話を次のように記しておられる。

（前略）これはエピソードだが、鷗外は校訂の余暇に、書経の講義をしてくれと蘆洲に乞うている。このことは実現し、毎週土曜の午後、図書寮の一室に鷗外は部下の希望者と共に集り、自ら筆を執って書き込みながら講義に聞き入っていたという。講義を乞われた蘆洲も偉いが、世に泰斗と仰がれながらも、なお向学心を失わなかった鷗外はまた流石であった。…この話はあまり知る人はない。」（昭和

四十七年十月十一日付、やまと新聞「史記補注の発刊に思う」の記事の一節)

右記のように、「史記補注」の刊行に際しては、絶大なるご声援をお寄せ下さったばかりか、更に先生は先考称揚の七律一首を賦され、自筆墨書され、これを大雲板に納めて、我等兄弟にお贈り下さいました。これは色紙二倍大余の大型のもので、今に家宝として自室に掲げ、朝夕先生に相見ゆるの心地で対面しております。

学兼漢宋厭時流
郷是難波古帝洲
傳世文章無克匹
等身述作有誰儔
經於考證陵先正
史向龍門窮博搜
一代鴻儒齊所仰
遺編萬卷照千秋

このご惠贈いただいた七律を訓読いたしますと、凡そ次のようになろうかと思われます。

学は漢宋を兼ねて時流^{あつ}を厭む。
郷は是れ難波の古帝洲。
世に傳^{つた}ふ文章は克^{よく}匹^{たふ}い無く。
身に等しきの述作は誰有^{ひとし}りてか儔^{らむ}からむ。
經は考證に於て先正^{しの}を陵^ぞぎ。
史は龍門へ向^{はく}って博搜^{くさう}を窮^{きわ}む。
一代の鴻儒^{こうじゆ}齊^{ひとし}く仰^{あが}ぐ所。
遺編萬卷千秋を照す。

「積善の家には余蘆あり」のたとえにそむかず、先生はご令嗣を始めとし、多勢のご賢子に恵まれ、どなたも立派に家を成されますこと、さぞかし先生もご満足であられたことと存じます。私自身、戦前戦後を通じて実に七十年に余る長い年月、温いご好誼をいただいたこととなります。この量り知れないご恩情の量と質とに於ては数多いご門弟中、恐らく第一位を占めるのではなかろうかと、思うにつけても、有り難く申訳ない心地であります。

○川合孝太郎（槃山）先生に師事して

余が説文学への傾倒と、川合槃山先生の思い出、——私は想うに漢学の思想は経学に存し、総ての学問はこの経学から発すると云ってもよい。この故に漢学を志す者は、必ずここに立脚しなければならない。私はとにかく思いながらも、経学や思想の面に殊に才能に乏しく、いつしか経学から離れ、いはば形而下とも思われる説文（文字学）を好むように成っていた。在学当時説文の授業は、学会第一人者であった川合孝太郎先生がご担当なさっておられた。先生のお講義は静かな口調で淡々と説文段注を訓読され、それに多少の解説を加えられると云ったものであった。なぜか私にとっては、この授業が一番楽しく思われて、自ずと身が入った。それで当時先生が主催されていた文京区妻恋町での「説文会」にも欠かさずに拝聴に出かけた。この会は先生が説文段注をテキストにして、お一人で訓読していかれるのを十名程の受講生が拝聴しながら、各自持参のテキストに、句点を入れていくと云った形式で進められていた。ここでは韻簡も用いず、指名も無かったので、気が楽でした。先生はいつも羽織・袴でおられた。その静かなお姿が今も目に浮かぶ心地がする。

先生の学風に思う。——当時（明治・大正・昭和の前半）の漢学会には錚々たる碩学鴻儒がおられたが、その中に在って、槃山先生の原典（殊に白文）を読みとく読書力の高さは、学界のひとしく認めるところであった。また先生は殊の他すぐれた蔵書家でもあり、至極書籍を大切に取り扱い

おられた。先生は已に所蔵の書籍であっても、書肆で綺麗な善書に出くわすと、幾許かの錢を支払って、その善書と交換していたと云われている。今日みる先生のご蔵書は巷間の噂にたがわず、いずれも綺麗であり手入れが整っている。次にご蔵書の種類はいかがかと尋ねてみるに、経・史・子・集の四部に行きわたる。就中、文字学（小学類）関係のものが多し。

先生はご在世中、ご著書は少なく、また自説を世に問われることも稀であったが、読書の間に気付かれた自説については、その都度書物の欄外や行間に書き込まれていた。この故に先生のご高説に接するには、ご蔵書をみればよいと云われている。… 槃山門下高弟の松本洪先生のお話によると、“自分等は槃山先生ご叢書の書き入れを整理して「槃山割記」を作りたいとはかったが、残念ながらこの企は遂に実現するに至らず、悔まれる”とのことであった。

○「槃山先生蔵書目録」について

先生の全蔵書は、無窮会図書館に納められており、昭和三十一年（1956）に『平沼騏一郎蔵書目録 第一輯 槃山先生旧蔵書目録』として無窮会より刊行されている。なお、この目録の巻頭には松本洪先生が『槃山先生の学風について』の題名の下に、四ページに渡って詳述されている。今、その冒頭の部分、八行が程を紹介したい。次のようである。

川合槃山先生は、旧姓は田口氏、伯耆の名族である。甫めて成童にして大阪に遊び、藤沢南岳先生の泊園書院に学んだが、数年にして郷に帰り、郷の先輩川合清丸先生の真教創立を助けて居られた。間もなく復た泊園に入り、研鑽実に十余年。川合先生が大道社を東京に興すに及んで、来りて其の業を助け、遂に大道学館の教授となった。之に因りて川合氏を嗣いだ。性は名利に淡く、諸方の学校に勤められたが、其の得る所は常に伴はなかった。それでも絶えて不平の色もなく、乏しい生活の中から、其の大半は書を購入に用いられた。先生は博せず、基せず、広く交遊せず、唯書を読むことのみ楽しみ

とせられた。酒は嗜む所と雖も数杯に過ぎず、茶は四季を通じて座隅に釜をかけ、自ら煎じ独り喫して居られた。

〔墓誌〕先生は病をえて昭和十五年三月十二日ご逝去なされ、ご自宅近くの谷中墓地に葬られた。槃山と共に早稲田大学教授の職に在った松本康國（天行）先生は槃山先生の墓誌を誌し、その文末の銘に次のように記されている。

擁書百城 惟君攸宅
左經右史 于朝于夕
掇精嚼餗 饜飲以饌
資之既深 宜哉自得
学追許鄭 今世希覲
噫無替人 儒林寂寞

○川田瑞穂（雪山）先生

先生は四国讃岐のご出身で、その生涯は正義を以て貫かれ、文章を以て世に知られた。就中、昭和二十年八月十五日の玉音放送で全国民に伝えられた、いわゆる「終戦のご詔勅」の起草者として知られている。このことについては、後に詳述したい。

雪山先生の人と為りと、その学風については、久しく先生の助手をしていた三浦叶氏（元就実女子大学教授）が、自著「先師片影」（平成三年十二月）の中で詳述されている。この一文は誠に先生のお人柄を美事に映し出しているのので、左にその一端を引用させていただこう。

「先生の学問は漢籍の外に明治維新の史料編纂官として当然明治の政治に詳しかったが、同時に故実にも明かった。又一方衆議院議長を勤めた片岡健吉の処に書生として寄宿し、次いで同じく名議長と認められた奥繁三郎と意気投合し、厚く信頼され、その後は司法大臣、内閣総理大臣を歴任された平沼騏一郎の信寵篤く、私の秘書の如く、その各方面の案文を起草された。こうした経歴の学者であったから、

更には内閣の囑託として直接その方面の文面も作られた。これを以てみても、先生は単なる一介の文人、学者でなく通儒であり、又実際政治の裏面にも通じていた活儒であられた。云々」とある。

次にまたお一人、木下彪氏（元宮内省御用係・元岡山大学教授）は、終戦の詔勅の起草者についての考証を試み、月刊情報「志道」（昭和五九年五月号）より前後三回にわたって詳述されたもので、私は同氏より直接恵贈されている。その標題には「川田瑞穂翁と安岡正篤翁く終戦詔勅の起草者と関与者」とあり、詔書起草の顛末については次のように記している。

「私は昭和二年以来翁と忘年の交りを結び、特に宮内省囑託となってからは、公私両面から一層関係が深くなった。其の公の面の一例を挙げると、紀元二千六百年記念式典の時、高松宮宣人親王の読まれた賀表は私が起草し、近衛内閣総理大臣の読む寿詞は川田翁が起草し、二人草持ち寄って互いに商量したことがある。そういう訳で、終戦の玉音放送の翌日、私は川田翁を其の家に訪い、詔書成立の経過と二三の疑問について質した。翁は自筆の詔書案草稿（大日本帝国政府用罫紙にペン書）と極秘の印ある内閣の謄写版刷「詔書案」とを示し、縷々として其の詳細を語った。今それを回憶し要約すれば次の如くである。

終戦の数日前、川田囑託は内閣（首相官邸）に呼出され、内閣書記官長から御前会議に於ける陛下の御言葉を覚書（メモ）したものを示され、急ぎ詔書の草案を作ること、陛下は特に「間違いないように書けよ」と念をお押しになった。云々」とある。

これら三浦・木下両氏の評語によって雪山先生の学風、並に終生に渡ってのお人柄を知ることが出来るのであるが、更に私は先生の身近に在った弟子の一人として常々感じたことを書き加えておきたい。

先生は終生たゆむことなく漢学の復興と、子弟の育成に力を尽しておられた。その第一は、大正の末年から昭和の初めにかけて、同志とともに

に大東文化学院の創立をはかって奔走し、力を尽されて、美事に成就なされた。その第二は、再び同志とともに無窮会々長平沼騏一郎氏を援け、宿願久しかった「無窮会東洋文化研究所」の開設へと漕ぎつけられたことである。

おもうに先生の人と為りは、常に正義をとえ、いわゆる硬骨の士であったが、その反面、人情に厚く、子弟を愛し、殊に夫人豊子様の内助の功あってか多くの子弟は期せずして先生の膝元に集った。

・雪山先生のご生卒年日

明治十二年（1879）五月、高知県土佐郡森村大字土居に生る。

昭和二十六年（1951）一月二十七日、東京にて没せらる。（享年七十一才）。

・ご著書

新抄日本外史 詩語集成 片岡健吉先生伝 芳流舎遺稿 毛常游記
峡中紀勝 帰展日誌 雪山存稿

・雪山川田瑞穂先生遺草（昭和四十六年「東洋文化」誌上に掲載）

○陸軍少佐竹下幾太郎教官の想い出

軍事優先の暗澹たる世相の中に在って、大東文化学院に着任された配属
将校陸軍少佐竹下幾太郎氏は誠に立派なお人柄であった。我等学生に対しても威張ることなく、常に冷静に事に当られ、ことごとくは是々非々の態度を保たれた。この故に多くの学生から深い信頼の念を寄せられた。昭和の期に入ると、教練は学科の一つとして実施された。但、我等の学院は已に述べたように、広い校庭と云ったものが無かったから、銃をになつての演習には校外へ出るしか術がなかった。雨の日には教室内で軍事に関する講義や戦闘図上訓練等が実施された。晴天の日には近くの第^(マ) 聯隊へ赴き兵舎前の広場を借りて訓練を受けるのが常であった。学院を出てから聯隊までの距離は歩いて十分程であった。当時の私どものいでたちは、脚にしっかりとゲートルを巻きつけ、肩にはいわゆる三八銃を荷い、靖国神社の

前を横切り、やがて九段坂上に達すると、すぐ前に衛門がみえる。この衛門（江戸城の北門に当り、田安門と呼ばれていた）に近づくと我等の一隊は一斉に歩調を整えて、見上げるばかりの衛門をくぐるのであった。この衛門内近くには常にいかめしい衛士たちが屯していたが、上官の号令一下、一斉に起ち上り棒げ銃の敬礼をする。これは引率の教官に対しての敬礼であることはわかっておりながらも、我等隊伍を組んで進む学生等にとっても心地よく、我等は出来うる限り膝を高くあげ、歩調をとって、この門衛の前を通り過ぎたものであった。

この思い出多いこの聯隊も昭和二十年の敗戦とともに今は已になく、その跡は都民の憩いの公園と成っている。開放されたこの北の丸公園内には、八角形の巨大な殿堂が建設され、日本武道館と呼ばれている。この館内で演出されるのは武術のみならず、歌謡・演芸その他、一般諸種の催しに開放されている。私はこの地を訪れる度ごとに、嘗て日本軍隊のありし日を思い浮べ、“夏草やつはものどもの夢のあと”の名句を想い出さずにはいられない。

私ら級友一同は竹下教官に親しみを覚えたが、教練の演習は決して楽なものではなかった。この教練を通して今日なお心に残る尤も深い思い出は、肩に銃を荷って奥多摩の小仏峠を踏破したあの日の思い出である。あの日は九段坂上の校舎を出てから、どの路をどのようにたどったか、その路順については、ハッキリとした記憶はない。ただ現在も手元に残っている一枚の「小仏峠踏破の記念写真」は、私になつかしい思い出を甦^(ツツ)えりさせてくれる。

再び小仏峠に立って、私は今から十六年前、^(ツツ) 齢八十二才の折り、学生時代の小仏峠行軍のあの日のことが無精になつかしく、旧時のコースをたどりながら、今一度小仏峠を越えてみたい欲望にかられた。そして遂に平成元年（1989）十月十日に、この小仏峠単独踏破を決行した。当日は天気晴朗、天もまたこの私の願いを祐けてくれるかのように思われた。

私はただ一人小仏峠の頂に立ち、遙か彼方の景信山を眺めながら暫し

休息し、筆を執ってスケッチを試みた。下に掲げたのがその折の拙作である。(解題者注：画割愛)。彼方の景信山を望みながら旧時をしのんだ。嘗て銃を荷って共にこの時に登った友等は、今は已に亡く、只一人生き残った私は、孤影悄然、一抹の淋しさを覚えた。帰路は一平台から見晴台を経て、高尾山口へと歩き、いささか年来の懸案を果しえた喜びを味合った。

○吉田増蔵（学軒）先生に師事して、その学殖に想う

(1) 世に知られた先生の功績

学軒先生は奈良女子師範教授の職を辞して、ひととき中学に教鞭を執っておられた頃、宮内省図書^{かき}の頭、森鷗外にその学識を認められ、宮内省に入り図書編集官に任ぜられている。時に大正九年（1920）のことであった。——世に元号「昭和」の考案者として、また昭和十六年（1941）の米・英両国に対する宣戦の詔書の草案者として知られている。

昭和二年六月の産経新聞の紙上には、この学軒先生の業績を取り上げて、『吉田増蔵氏の遺稿見つかるゝ、宮号や勅語草案、膨大な考察資料見つかる』との大見出しの下に、前後五日間にわたって連載された。このような先生の公務についてのご業績には云うまでもないことながら、私的研究についても知る限りのことを書き残しておきたく思う。

(2) 先生に師事した頃の想い出

A. 先生との始めての出合い——本朝文粹のお講義に想う

私が始めて先生にお会いしたのは大東文化学院高等科の授業の本朝文粹（ほんちょうもんずい）のお講義の時であった。この時受けた印象は今もハッキリと覚えている。先生は背丈のやや低めの小ぶとりで、齢は還暦に近いとお見受けした。但、そのお講義は一語一語に力がこもり、気力に満ち満ちておられた。先生の授業のあり方は、テキストの中の一編を、ご自身で読み且つ講義されるのが常で、生徒を指名して、読ます

ことはなかった。この故に私等学生はただ拝聴しておればよかった。当時、輪講の授業にいささか苦しんでいた我等にとっては、一見甚だ楽なように思われるが、その実は苦しみの連続であった。なぜか？と云うに、この「本朝文粹」なる書は、平安朝時代の第一級の学者らの詩文の力作を取めたものであり、それぞれの作者は中国古典の古語を多用し、且つ随所に対句を用いて表現しているなどに因る。いわば文中の作品は古語と対句とを散りばめて、つづられていると云うも過言ではない。

これらの作品を正しく理解するためには、まず、中国六朝文学の特色である「対句」に暁通し、且つ「古語」に対しての十分な学力が要求される。これなくしては、いかに読めども真の理解はえられない。ましてや学生時代の私のごとき学力の乏しい者にとっては、中々に歯の立つ教材ではなかった。今から思い返せば、折角の先生の蘊蓄を傾けられた授業にも、十分に理解することもできず、誠に「猫に小判」の喩の通りでもったいないことであった。

B. 先生の助手を拝命した頃の忘れ難い思い出

昭和七年(1932)春四月、私は先生の助手五人の中の一人として採用された。そして日夕親しくお目にかかることと成った。それは私の学院を出たての若い頃のことでしたから先生から受けた印象も殊の外に強く、今もなお忘れ難いものがあります。先生のお姿と人と為りについては前項に記しました通り、背丈はやや低めながらも、常に胸を張って人に対せられ、実に堂々たるものでした。それと云うのも、先生の学問に対する確固たる自信から自ずと生れくるものであったものと思われます。先生は話柄がひとたび国家の前途に及ぶと、慷慨の気、満面に現われて、その気魄は人を圧倒せずにはおかぬものがあつた。是非を正し堂々と己が信念を貫き通した。相手がたとえ貴人・上官であろうとも決して屈することは無かつた。然しながら私たち助手や子弟に対しては厳正な中にも、常にやさしく、じゅんじゅんと説ききかせ、時を惜しまずに丁寧に教えられた。それはあたかも慈父の子に接するかのようであつた。あ

れからもう七十年を経ている今日、今なおあのお姿が臉の底に浮ぶ心地がする。先生のこの気魄は天性のものであったのでしょう。

先生は、また一方に於て、水戸学に深く関心を寄せておられた。私たち助手の入所した年の秋に、先生は四名の助手を引きつれて水戸見学の一泊の旅を試みられた。一行は名所旧跡を訪れ、弘道館・偕楽園・好文亭等を見学し、海岸に出ては岩にくだける浪しぶきの立ちのぼる大洗へも廻ったが、あれから早くも幾年月は流れ去って、いつしか私の記憶も薄れがちになって、当時果してどのようなコースをたどったかは、ハッキリとは思ひ出せない。それとともに旅の印象も薄れてしまったが、その間に在って、今なお鮮明に想ひ出せるのは唯一つ、西山荘のたたずまいである。あのお住いの閑雅静寂さは強い印象となって、今もハッキリと、兩の臉の底に残っている。この西山荘是水戸藩主徳川光圀（義公）の晩年の隠居所であった。誠に質素なたたずまいであった。この人と、その業績とは、今もなお巷間に膾炙されているのもむべなる哉と思われる。特に公の偉業として特筆すべきは、「大日本史」の編纂に着手されたことである。この書は我が国民の大義名分を正したもので、その編輯の大業は公の没後も延々と受けつがれ、着手の時より二五〇年後の明治時代の末近くになって、ようやく完成をみている。全編は無慮三九七巻の多きに及んでいる。その昔、学軒先生が私等助手をひきつれての水戸清遊は、また無言の中に将来向うべき正道を暗示されたものであった。

C. 助手就任の喜びにもえて

昭和七年四月（1932）に開設された書原撰述所は吉田先生のお宅の構内に建てられた。当時、五名の助手の中には二松学舎専門学校をこの春に卒業された方が三名（亀谷文雄・早尻好文・森本隆男）と、先生のご次男（勝敏）とがおられ、それに私を加えて総勢五名であった。二松出身の三名の方々は皆よく出来た。それと云うのも学軒先生は当時の二松学舎学長の山田準（済齋）先生宛に新卒業生の採用を申込み、その折りの条件として“今年度に於ける卒業成績の第一番・二番・三番の三名を送っ

て欲しい”との依頼があったとのことでした。先生のご次男はいくばくもなくして京都帝国大学へ入学されましたので、実際には余り仕事をなさる期間は無かったと思います。

この時、私等助手の給料は月に五十円であった。私は生れて始めて自立することとなり、家庭を離れて撰述所に程近いところに下宿した。この宿は二階建てで、二階は六畳ひとまの構造であった。私はこの六畳ひとまを借りた。ここは誠に粗末なところであったが、朝夕のまかない付きで、月額二十三円五十銭と、今日の相場からみたら夢のような安価なものでした。同僚の方々もそれぞれに撰述所の近くに下宿されていた。

私は大東文化学院の在学中に、終生の研究目標を説文（中国古代の文字学）に決めていたので、今回の就職は私の望みどおりでもあり、殊の他にうれしく思われた。いはばこの書原撰述所勤務は私にとっての理想の職場とも云えるものであった。私は二松出身の方々と共に学ぶ意欲にかられていた。

D. 四名の同僚諸子と涙の別れ

好事魔多しの譬にもれず、やがて私の夢は破られることとなった。それは翌年1月（昭和八年（1933）一月二十三日）の夜、実父（池田四郎次郎・号は蘆洲）の輪禍による不慮の急逝に遭い、私を取りまく家庭の事情は一変することとなった。当時、両弟はなお大学在学中であり、私は家兄とともに老母を支えなければならぬ立場にあった。このような事情にて父を亡った打撃は大きかった。時に私の母校の校長でもあり、亡父とも昵懇であった猪狩又蔵（史山）先生は私等の窮状を察せられ、私を母校の日本中学校（杉浦重剛先生の創立）に拾ってやろうとのご厚情から直接に吉田先生へ割愛を請われた。吉田先生もまた事情を察せられて、ご快諾下さった。このような次第にて、四月から私は母校へ移り教鞭を執ることとなった。結局、書原撰述所には一ヶ年程しか勤められなかった。そして私の後任には特に人を迎えることもなく、二松学舎出身の三面の方々が全力を傾注して事に当られた。但、その後とも、毎週土

曜の午後に催される作詩会には、従前通りに出席を許された。この会はその後撰述所の閉じるまで長くつづいた。

(3) 学軒先生にみる詩学について

A. 毎週土曜日の午後開催の作詩会（逐鹿戦）の思い出

書原撰述所の仕事は、土曜は正午で終り、午後は先生主催の作詩会（漢詩）が開かれるのが恒例となっていた。会員は先生と四名の助手との五名であった。先生のご都合の悪い日以外は必ず開かれた。これは私ら助手どもにとっては楽しくもあり、またつらくもあった思い出として今に残っている。

毎土曜日の正午になると先生から、いつも作詩の課題が発表される。四名の助手どもは、詩会の始まる二時頃までに各自に、この題名の下に七言絶句一首を詠まなくてはならぬ定めであった。助手どもは昼食をとりながら、趣向を練り、平仄を合せ、兎も角も二十八字をまとめあげなくてはならなかった。幸にすうらといく時はよろしいが、大抵は苦吟の連続であったから、折角の昼食も「食へども、其の味を知らず」と云った態であった。やがて、どうやら七絶の出来上るのを待って、四名の中の一人が代表となって、これら四首の詩を一枚の半紙に清書して先生へ提出するのであった。この清書には詠者の「なまえ」は記さない定めであったから、添作して下さる先生は、どの詩が誰の作品であるのかは、おわかりにならないわけである。

午後二時の開会を迎えると、助手どもは先生を囲み、先生は詩稿を一覧されての後、おもむろに朱筆を執って添削されながら、その添削された理由について語られる。この四首の頭部へ、甲・乙・丙・丁と一字ずつ記していかれるのであった。この甲をもらった詠者は、今回の添削付きの詩稿を獲得することが出来る定めであった。四名の助手たちは、この甲印を得ようと競いあった。それは、あたかも史記淮陰侯列伝中にみえる「中原に鹿を逐ふ」の故事に因んで逐鹿戦（ちくろくせん）と呼び

合っていた。この詩会は長期間つづいた。私は初めの一年で退所となったが、その後とも幸にこの会への出席を許され、ひきつづいて通いつづけた。その長い間には私も幾回か甲印を手にすることが出来た。その稿は今も手元に残っている。然しながら助手の中で尤も多くの甲印を射止めたのは、畏友西部文雄（旧姓亀谷氏）であった。「詩は別才」と云われるが、誠に然りで、助手四名の中、ただひとり氏は先生の衣鉢を継いで、後年漢詩人として名を成した。氏の著作には、自家漢詩集を始めとし「万葉集訳詩集六巻」「藤城詩稿補注」等々を著し、故郷の岐阜に在りて、今に気を吐いている。同志の早尻好文・森本隆男の両氏は惜しい哉、早々と逝去されてしまった。

この土曜の漢詩会の思い出も、いつしか七十年前のことと成ってしまったが、今なお思い浮かぶのは、先生のおごりの「せんべい」が、いつも大皿に山盛りに用意されていたことである。私たち助手らは先生のお話に耳を傾けながら、この「せんべい」をかじりかじり伺った。詩会の終了頃には、決して日は西に沈んでいた。先生はご勤務の宮内省のご公務や、ご自分の創作活動で、いつもご多忙のご様子におみうけ申したが、弟子どもを一人前の学者に育てあげようのご意思から進んで、このような会を設けられ、時間を割かれた。今に在り難いことと思っている。

B. 学軒先生入魂の詩集「為山篇」を頂戴して

先生からこの詩集をいただいたのは昭和十年（1935）であった。恐らく先生はご自分の古稀にのぼられたのを記念しての刊行であったものと存ぜられる。この作品は出典を四書・五経から多く引用されており、読者にとっては中々難解な作品と云える。

この詩集をいただいた当時の私達は、まだ二十才代なかばの弱輩で、恥しながら学力も浅薄であったから、これを拝誦しながらも、その内容を十分に理解することは出来なかった。爾来、苒然時を空送し、フト気づけば、互に八十の老翁となっていた。この書に対し懐旧の念・報恩の思いと、しきりに湧き起り、遅まきながらも両人力を併せて、先ずは「原

文に訓点を施し」また「書き下し文」を添えて、世に贈りたいものと協議一決し、直ちに刊行を目指して行動を開始した。但、この間に困ったことには、西部学兄は岐阜県美濃市に在住し、池田は東京に在って、この間、相距たること数百キロ、互に老齢なれば会合することも容易ならず、已むなく資料の交換を郵便に托し、東海道を幾十回と往來することによって、ようやく完稿へと漕ぎつけたのであった。嬉しいことは、西部学兄は「跋文」を書き上げてくれたことである。これは巻末に付した。この跋文の解説によって、さしも難解と思われたこの長篇の段落も、また各段^(コマ)ごとの主意も明確に理解することができるようになった。今回は約四十部を作成し、互の知友に頒った。なおこの書の見返しには「為山篇と、その訓読」と誌しておいた。

この刊行のことがあってから、またいつしか時は流れ、フト気付けば今年、西部学兄は満九十六才、そしてこの池田は九十八才の老境に入っている。

さて、本篇の内容については西部学兄は、跋文の第三ページに次のように解説されている。ごくごく一部分の抜粋に止めるが、次に示そう。

「篇名は、書き出しの「為山一簣」の二字をとってつけられたのであろう。為山篇は大別して三段から構成されている。(中略)本篇は始めから終りまで思考する山水・行動する山水を巧に比喩的に使って作られた異色の典籍である」と。

今茲に改めて先生より受けた数々のご薫陶に対して感謝すると共に、先生ならびに親しく机を並べていた亡き友人の冥福をお祈りしつつ、拙い筆を擱く次第である。

平成丁丑年六月 識

<(注) 丁丑年は平成9年、西暦1997年に為る>

C. 待望久しかった「学軒詩集」遂に為る

待望久しかった「学軒詩集」の刊行は遂に成った。思えばこの刊行の業は学軒先生のご逝去以来、江湖の人士のひとしく待望するところでも

あり、殊に先生のご長女三浦ふゆ子氏は、「学軒詩集」の一日も早い刊行を願いながらも、その編輯校訂等々の事に当たりうる佳人にめぐりあえぬままに、心ならずも数十年の歳月を空送してしまっていた。幸なる哉、一昨々年来、無窮会理事、国広寿氏の献身的協力を得て、遂に難関を克服し、見事にこの度の出版へと漕ぎつけた。ふゆ子氏は上梓の費を出し、ご長女由紀子氏は母君の負担を思いやって自らパソコンを打ち、国広氏の原稿を活字原稿に調整され、中頃よりは、ご長男克民氏がこれに当られるなど、一家を挙げての誠にうるわしい協力振りであった。また財団法人無窮会は生前学軒先生との深いご縁を思われて、進んで発行所を引き受けて下されている。嘗てお教えを受けた弟子等にとって、誠にうれしいことである。

D. 先生の詩風について

先生の詩は、単に花鳥風月を詠み楽しむと云う、いわゆる風流なものだけではなく、いわゆる学者の詩であり、その根底にあるものは、和漢の古聖賢を追慕し、尽忠報国の士を顕彰するの気概に燃えておられる。従って先生の胸中に満ちみちるの想いを吐露される言葉も自ずから格調高い和漢の古典籍中の古語を多様され、表現の形式としては対句を多く用いている。先生の長詩には数百韻に及ぶものも少なくない。この故に先生の漢詩は、おしなべて思想は深遠で格調は高く、これが為めに一般の読者にとっては中々に難解視されている。

西部学兄は先生の詩風について次のように述べている。学軒先生についての詩論を知るには、天行・松平康国先生の学軒詩集の序を熟読することである。学軒先生の詩が読みたくなるのは、対句王の名号通り対句の音律の流麗さである。先生の対句は、考えるのではなく、作るのではなく、蚕の糸を吐くように口から出る語がそのまま対句となるような感じさえする。むしろ後者の方にウエイトがあるように思う。(中略)先生の詩が誦みたくなるのは、対句王の名号通り対句の美しさである。律詩・俳律を見れば一目瞭然である。いちいち取りあげれば枚挙に暇がないが、

一、二例をあげてみよう。七言絶句全体が対句化している。

壬午暮春、謁佛山先生墓
高会回頭如昨日。仙遊屈指已三年。
人空碑畔寂松籟。春儘山中哀杜鵑。
至水哉園途上口占
古佛山前去斷續。詩人村外路高低。
書聲遠被松風奪。燈火遙穿竹翠迷。

先生の詩は、学者としての詩は深奥であり重厚であり、詩人としての詩は美しさが圧巻である、云々と述べられている。

次に先生の自筆稿を拝見すると、その殆どは毛筆墨書で誌されており、その書体は闊達な行書・草書体である。このようなわけで、遺稿を正しく解説し、これを誤りなく楷書体書き改めるには、余程の実力者の出現を待たなくてはならない。全草稿を楷書原稿に書き改められた国広寿氏の労には頭の下れる思いがする。

昨年初夏、「学軒詩集」刊行の折りにはご長女ふゆ子様を始め、ご子孫は先生の眠る多磨霊園の苔むす墓前にぬかずいて新刊一冊をお供えし、刊行のご報告をなされた。国広氏と私もお招きいただいた。

(4) 書原撰述所の開設と、六〇〇余字に及ぶ字源の発見

A. 開所と、その抱負

先生の宿願成って、「書原撰述所」は昭和七年（1932）四月に開設された。これは外務省の対支文化事業からの莫大な研究資金の供与があって、向後五ヶ年の継続事業として発足したものであった。五ヶ年間にわたる研究費の総額は、今日の物価に換算してみると、凡そ数千万円に及ぶものと思われる。誠に雄大な計画事業であったと云える。

（附記）これに先立って、先生は「書原撰述所創立趣意書」（活字印刷十四頁に及ぶ）なる一書をしたためて、外務省へ提出し、研究費の下付

を申請している。この冊子は、その後、池田英雄編集の「吉田学軒説文字源新説の摘要と紹介」の第八冊目に収録されている。そして現在は無窮会専門図書館に収蔵されている。

B. 学軒独自の説文研究法

先生の説文研究のあり方は、先人の旧説を祖述することを好まれず、常に自己の新しい目を以て開明し、新説を樹てられた。古来多くの研究者の信奉し、最大のよりどころとした後漢の許慎の著なる「説文解字」についても、これに盲従することなく、その説の誤謬を訂し、また清朝の四大書とあがめられた段玉裁・王筠・桂馥・朱駿声等の所謂「四大書」の諸説についても、常に是々非々の立場をとっておられた。先生は独自の見解を以て、これらの書の誤謬を正し、自ら世に向って、「余は凡そ六百余字の字原の発見を了せり」と、豪語されている。先生の説文研究はこのような強固なる信念の下に進められたものであった。そもそも説文の研究は、明治の末年頃より手を染められ、以後、大正・昭和へと絶えることなく抱きつづけられていた。昭和七年四月の「書原撰述所」の開所は、永年にわたって抱きつづけられた夢の実現をみたものでもあり、これより先生の研究はいよいよ進み、日々筆を執っての解説の原稿は、年とともに積り積って、今日に残る遺稿の量は、余人の想像を絶する膨大なものとなっている。

C. 書原撰述所の「書原」の意味

先生の命名されたこの書原とは「文字の成り立ちのもと」と理解したら大体よろしい。然しながら世間一般の人々にとっては、余り聞き馴れたことばではない。従ってその意味を理解し難い。現代の文字の用法からすると、「書原」の書の字は「書籍」とか「書道」を意味し、動詞としては「かく」となる。これから連想して「書原撰述所」とは、さしづめ「書店」か「書道の塾」関係のところと思うにちがいない。

中国の大昔の時代には書の字は文字の意味に用いられていた。今から二千数百年前に著されたと云う周礼の「地官・保氏」の条には「六書」と

云うことばがみえる。この六書とは、「1. 象形 2. 会意 3. 転注 4. 処事 5. 仮借 6. 諧声也」と注記されており、文字の成り立ちと、運用法とを説いたものである。つまり、古代の書とは、現代の文字の意味である。学軒先生は古意に従っているわけでした。

D. 書原撰述所に取り組む三名の助手の方々の抱負と展望

三名の助手の方々は、撰述所開設の翌々年（昭和九年・1934）に、「書原即ち字原研究の一斑」と題する一文を草し、世に発表された。その内容は「開所より五ヶ年間に成し遂げたい遠大な計画と、着手の手順」とを力強く語ったものである。これは恐らく先生の意を体してのこととは思われるが、実に遠大な計画と云わねばならない。全文は活字印刷十三ページに及ぶ長文の力作である。（この冊子は「吉田学軒説文字源新説の摘要と紹介」池田英雄編の第八冊めに収録、現在は無窮会専門図書館に所蔵）

(5) 学軒先生の遺された二分野（④詩文・⑩説文）に於ける学績に想う

④先生は「詩文」を以て世に鳴り、万人の敬仰するところと成った。

⑩先生は「説文（文字学）」に想いをこらし、六〇〇余字の字源を発見された。

ひそかに思うに、一人の力にして異色の二分野を克服し、千載にその名を留めることは、世に稀なることと云わなくてはならない。更に刮目すべきは先生のこの④と⑩の間にとられた全く異質の行動、——即ち師友関係に於ける驚くべき差異のあることである。

④の「詩文」の修得に当っては、終始自ら進んで師友を求め、切磋琢磨し、これによって多大なる誘掖を受けている。

⑩の「説文」の研究にあつては、生涯にわたって一人の師もなく友もないひたすら独力探求につとめ、遂に前人未踏の境地を開拓し、六〇〇余字の字原^(ママ)を発見し終えている。

ついでに、この④「詩文」と⑩「説文」と、この両面にわたって、

先生のとられた足跡をたどってみたい。

④ 先生の詩文に於ける師友の交流の跡を尋ねてみると、師友の交流は生涯を通じて絶えることはなかった。幼少の頃は郷里豊前京都郡田村なる村上仏山の門に入り、明治十六年上京の後、蒲生重章・隄正勝・長芑・谷口藍田・根本通明・三島毅・南摩綱紀の諸人に従遊し、義経を質し、詩文の是正を乞うている。幼少で佛山の塾に在る頃は、同輩中もっとも詩に長じたので小仏山と称せられたという。学成るに及んでは、数百韻に及ぶ長編の排律をよくせられた。為めに世人は先生を称して対句王と呼んだ。松平天行とは共に学び、互いに知己を以て任じ、経学・詩文を通じてその友情は終生変ることなかった。

先生は晩年に弟子どもに向い、邦人の詩人では同郷の先哲広瀬淡窓をたたえ、その詩集「遠思樓集」の愛誦をすすめた。広瀬旭莊・村上仏山を慕われ、書家では長三洲を褒めた。一方、万葉集の研究では万葉学者佐々木信綱氏との往来も多かった。このように詩文の面に於ては、あまたの師友に恵まれて、多大なる誘掖を得たものと思われる。

⑤ 先生の説文研究のあり方を尋ねてみると、この説文の研究の面に在っては、只一人の師もなく友もない。徹頭徹尾ただ独力で開拓されている。このことは却って師門の伝統に縛られることもなく、心に閃く自由な着想によって前人未踏の新説を打ち樹てられたものと思われる。

(6) 先生ご発表の「篆隸辨疑歌」について

このご作品には、題名に「歌」の字が付されているが、これは和歌・俳句の類ではない。各句押韻の形式を用いながら、個々の漢字について、その正誤を弁別されたものである。

「文字学と漢詩との合体」——学軒先生の独壇場

この篆隸辨疑歌は学軒先生の昭和四年(1929)の作にて、全編押韻、五十九条から成り、各条ごとに四句一解の形をとり、通計二三六句の長編である。

全編の趣旨は第51条によく表わされているので、原文のまま示そう。

第51条 畢竟不通籀興篆 隸楷如何得能辨

惟其篆文染指來 縱橫可以究墳典

私は先生の、このような高著の世に知られざるを惜み、菲才をかえりみず、原本にいささかの「よみ」と「解説」とを付して、冊子となし知人に贈った。あの時より早くも二十年近くを空送してしまった。重複みではあるが、なつかしい思い出として左に掲げてみたい。

『篆隸辨疑歌と、その解釈』原本 池田英雄 手稿 (割愛)

(7) 学軒先生的全遺稿 ——無窮会専門図書館に収蔵さる

A. 書庫に空しく眠る旧稿の山

先生は字源新説の発見と、その解説とに専従され、またこれを学者の生き甲斐となされたようにお見受けした。ただ惜むらくは、新説の発見と学説の樹立とに急なる余り、これらを世に発表して江湖の人士に問われると云うことは無かった。この故に先生の没後はこれを知る者も稀となり、先生が生涯をかけて執筆された膨大な量の字源探求の玉稿も空しく書庫に眠りつづけている。これは誠に残念なことである。

B. いささか玉稿の整理にたずさわって

私は書ての助手の一人として見るに忍びず、何とか一日たりとも早く、これが整理に着手しなければならぬと思いつづけながらも、つつい自分の已むなき一連の仕事に追いまくられて、いつしか幾十年かを空送してしまった。齢七十七才の春からようやく暇をえて、毎月、月の半分を遺稿の整理にあてることが叶い、約三ヶ年にして一先ず整理し了えることが出来た。そして全玉稿の閲覧の手引書を作り、「吉田学軒説文字源新説の摘要と紹介」と題し、同種三部を作製し、このうち、二部を無窮会専門図書館に納め、一部を家蔵している。その内容は四部門から成り、B4版、コピー綴り、全八冊。1988(昭和六十三年)門人池田英雄編とした。

右の拙稿のようやく完成に近づく頃、その昔、書原撰述所の助手をし

て互に机を並べていた畏友西部文雄（蘇軒）氏は遙々岐阜の地から嬉しい信りを寄せてくれた。その中には学軒先生の学説についての貴重な資料と、氏の研究資料とが含まれていた。それは題して「『吉田学軒著、説文声系十四卷について』門人、西部文雄」と云うものであった。また今回の私の拙著に対しては、「後記」を添えて呉れた。これらを手にした私はこよなく嬉しく思い、これらを拙著の第四部「諸研究資料編」の第八冊目に挿入し、全編を締めくくることが出来たのであった。また私にとって嬉しかったことは、先生のご長女三浦ふゆ子女史が殊の他、関心を持って下され、陰になり陽になり、私の遺稿整理の仕事を見守り何かと援助して下さったことであった。嘗ての同僚と先生のご遺族からの励ましがあったればこそ私の拙い仕事も無事完成に漕ぎつけられたと思い、感謝の念にたえない。

(8) 収蔵後の蔵書と、手沢稿類のその後の運命

A. ご蔵書の整理と、無窮会図書館への納入

先生の多年にわたってご収蔵の書籍は撰述所の開所以前に已に豊富な量であったが、同所の開設に当り新たに説文・金石・契文関係の書籍を多量に購入され、書室はいわゆる汗牛充棟のことばにふさわしいまでに充実したものであった。その上に先生直筆の文字学、並に漢詩稿類は幾万枚とも数知れず、それは小山のように、うず高く積まれていた。

先生のご逝去の翌年（昭和十七年の冬）私は若い奥様からのご依頼を受けて、蔵書整理の仕事をお引き受けいたしました。それは寒い初冬のことであったと記憶しております。これは撰述所閉鎖の数年後のことでありましたので、嘗て先生をお援けしていた三名の助手たちも、めいめに故郷に帰って就職しておりましたので、お手伝いの出来る者は私より他にいなかったのでしょうか。当時、私は母校の日本中学校（旧制）に勤めておりましたが、その余暇をみつけては書庫へ通い蔵書目録の作製につとめました。それは寒い初冬の数ヶ月であったと記憶しております。

私はいつしか風邪にかかり無理がこうじて遂に臥床の身と成り、仕事をつづけることが出来なくなりました。そこで已むなく、その後のことを知友の石川梅次郎氏へ托しました。氏は幸いに快諾してくれ、よく図書を整理し、目録を作製してくれました。ご遺族は先生が生前にご縁の深かった無窮会図書館へ納めたいとのご希望にて、会と交渉されましたところ、幸に無窮会も快諾され、納入時には相当の代価を支払われたと云うことでした。その折りには中途にて挫折して余りお役にもたたなかった私にも奥様から手厚いご挨拶がありました。

B. はからずも学軒先生の旧蔵書の受難^(ママ)に遇うこと

上述のように学軒先生の旧蔵書は無事に無窮会図書館に納まることとなつて、一同安堵いたしました。その後、いくばくも無くして、先生の旧蔵書は辛い運命をたどることと成りました。それと云うのは終戦後の一時期、無窮会も財政難に陥り、運営に苦しみました。これが打開策の一つとして、やむなく「同種類の重複している書籍については、その中の片方を残し、片方を手放すこととなりました。学軒先生の旧蔵書は説文・金石・契文関連のいわゆる文字学方面のものが中心となっており、これはまた同種類のものを主としている川合孝太郎先生の旧蔵書と重複しているものが大分多く、このために学軒先生の旧蔵書の多くは放出の対象となりました。已むえぬこととは云いながらも、今日、先生のご蔵書の多くを見ることの出来ないことは残念なことです。但し、数万枚に及ぶ先生のご自筆の漢詩稿、並に前述の説文関連の原稿は昭和十七年に入庫した当時のままに完全に愛蔵されております。

(9) 吉田学軒の貴重な資料の新発見（産経新聞、五日間の連載）

産経新聞は第一面の冒頭見出しに、元号「昭和」の発案者「吉田増蔵氏の遺稿見つかる——官号や勅語草案、膨大な考察資料」と題し、前後五日間にわたって（平成二年（1990）六月十八日（月）より二十三日（土）まで）同紙紙上に連載した。左にその幾許かを抄録してみたい。

第一日め(六月十四日)の冒頭に次のように記している。

元号「昭和」の考案者として知られる漢学者で元宮内省図書寮編修官、故吉田増蔵氏の遺稿が財団法人「無窮会」(東京都町田市、平沼恭四郎理事長)の専門図書館に所蔵されていることが十七日までに明らかになった。遺稿は吉田氏が携わった宮内省関係資料のほか、漢字字源や、日本書紀などの研究書類、自作漢詩など、膨大な量にのぼっている。特に、昭和の即位礼の天皇の勅語草案や勅語起草委員会議事録、天皇陛下をはじめとする昭和天皇の親王、内親王の名前、称号の草案、秩父宮の官号案など、大正から昭和にかけての皇室制度や皇位継承儀式の裏側を知るうえで極めて貴重な史料が含まれており、学者もその史料的価値を高く評価している。云々とある。

また、五日めの最終稿には「鵬外が見抜いた才能」との見出しの下に誌されている。ここには、その中の一部分を摘記してみたい。

「宮内省に入ることになったのは、当時図書頭だった森鵬外がその才能に着目したからだった。…(中略)吉田氏が図書寮編修官に採用されるのは大正九年十月。同年に都合で奈良女高師を退職した後、一時、山口県の中学校で漢文を教えている。このころ、宮内省入省の話があり、中学校の後任者も決ったのになかなか正式採用にならず、「窮境に陥」ったので、「御採用相成り候様御願ひ申し上げ」る、という鵬外あての手紙が鵬外記念本郷図書館(東京都文京区)に保存されている。

鵬外は図書頭に就任した二年後の大正八年から約一年半をかけて、歴代天皇のおくり名の元号の出典を考証した「帝諡考」をまとめた。続いて、大化以来明治にいたる二百四十余の元号の出典を考証した「元号考」に着手するが、完成前に死去。吉田氏が引き続いて完成させた。…(中略)鵬外は生前、自分の蔵書をすべて吉田氏に譲りたい、ともらしていたが、吉田氏が遠慮したという。…(中略)吉田氏と親交があった文人の与謝野鉄幹・晶子夫妻がいる。無窮会の遺稿中

には、自作の詩をみてもらったことに対する鉄幹の礼状が含まれていた云々」と記している。

(結語) 先生は公務として宮内省に出仕され、主として詔勅の起草の任に当られたことは已に世に衆知の^(ママ)ことであるが、一方家に在っては漢詩人であり、また古代文字研究の学者であった。(一) ご勅語の起草と、(二) 漢詩作り、(三) 説文(文字学)の研究と、この全く性格の異なる三分野を一手に^(ママ)クリヤされ、多大なる成果を後世に残されている。余人のまねしがたいところであったが、太平洋戦争の開始直後の昭和十六年十二月十九日、七十六才の生涯を閉じられた。現在の新宿上落合のご自宅で行われた葬儀には天皇・皇后両陛下より供物が贈られ、正四位、勲三等瑞宝章を授けられている。墓所は多磨霊園に在る。

【Introduction of Research Materials】

**Hideo Ikeda's "Shūgaku no Dōjō Kaisōroku-
Nanajunen mae no Omoide no Ito wo Tagurite"
(Recalling the Hall of Learning: A Memory of
Daito Bunka Gakuin 70 Years Ago) Chapter 4**

Nina Asanuma